ソ連，東欧の社会主義の崩壊とその歴史的教訓

井上周八

まえがき
Ⅰ『共産党宣言』と『平壌宣言』
——『平壌宣言』の歴史的意義——
Ⅱ　マルクスによる社会主義・共産主義学説の創始
Ⅲ　レーニン主義と10月社会主義革命の勝利
Ⅳ　社会主義の世界的規模での成立とソ連，東欧社会主義の崩壊
Ⅴ　ソ連，東欧の社会主義崩壊の歴史的教訓について

はじめに

人間は遠い昔から，しあわせを願い，理想の社会を求めてきた。

すべての宗教も，すべての哲学も，その究極の目的は，人間をしあわせにすることであるといえよう。

人類の理想社会は，はじめは宗教的に，ユートピア的に描かれていたが，1840年代になってようやく，理想の社会とはどのような社会であり，理想の社会を実現する方途はどのような方途であるかについての科学的理論が創始された。マルクス（1818年～1883年）とエンゲルス（1820年～1895年）の社会主義・共産主義理論がそれであり，レーニン（1870年～1924年）によって継承発展されたマルクス・レーニン主義の社会主義・共産主義理論がそれである。

1917年10月，レーニンはロシアでプロレタリア革命に成功し，「一国社会主義」を実現した。そして第二次世界大戦後，社会主義社会は世界的範囲で出現した。

にも抱らず，1980年代の末期にいたって，ソ連，東欧の社会主義は相次いで挫折，崩壊し，全世界に大きな衝撃を与えた。

ソ連，東欧の社会主義が崩壊し，資本主義へ復帰しつつあるのは何を意味するのであろうか。

ソ連，東欧の社会主義の崩壊に対しては，当然のことながら資本主義陣営からは，社会主義の敗北であり，資本主義の勝利であることが喧伝されたが，これとは異なり，それらの国で社会主義は崩壊したけれども，それがそのまま資本主義の勝利を意味するものではなく，人類には資本主義でも社会主義でもない第三の選択がある筈だと説く人もいる。

またこれらの見解とは反対に，ソ連，東欧の出来事は，なんら社会主義の正当性と優位性を否定するものではない，それらの国の社会主義が挫折したのは，それらの国が社会主義でなくなり，社会主義としての優位性を発揮できなくなったからだという見解がある。

ソ連，東欧の社会主義の崩壊がなぜおこったのかを考える場合，まず明らかにしなければならないのは，社会主義の本質をどのように把握するか，ということである。

社会主義とは政権と生産手段を勤労人民大衆が所有し，資本の搾取と抑圧から，勤労人民大衆を解放する社会である，という見解がある。しかし資本の搾取と抑圧から解放されれば，社会主義はおのずと発展するものであろうか。社会主義制度が樹立され，資本の搾取と抑圧がなくなったとしても，党が特権的立場を占め，官僚主義が横行するならば社会主義がその本来の優位性を発揮できなくなるのは当然である。

社会主義は制度の問題としてだけでなく，あくまでも人間＝人民大衆を中心にして考えなければならない。人間中心に社会主義の本質を規定すれば，社会主義とは人民大衆が社会の真の主人となっている国であり，社会のあらゆるものが人間に奉仕する社会である。

金日成主席は次のように述べている。

「わが国の社会主義は，一言でいってチュチェ思想を具現した人間中心の社会主義であります。われわれの社会主義の本質的特徴は，人民大衆が社会の真の主人となっており，社会のすべてのものが人民大衆に奉仕する真の人民の社会であるというところにあります。」（「わが国の社会主義の優位性をさらに強く発揮させよう」1990年5月24日）

ここで述べられているように「人民大衆が社会の真の主人となっており，社会のすべてのものが人民大衆に奉仕する真の人民の社会」こそが，社会主義社会なのである。

それゆえ人民大衆を中心にして社会主義を理解し，この理解にもとづいてソ連，東欧の社会主義の崩壊の原因をみなければ，正しい解答は得られないであろう。

ソ連，東欧で，人民大衆は果して社会の真の主人となっていたのであろうか。この問題の考察に先立って，マルクスとエンゲルスの執筆した『共産党宣言』と昨年4月の『平壌宣言』のもつ意味とその歴史的意義についてみることにしよう。

Ⅰ　『共産党宣言』（1848年）と『平壌宣言』（1992年）

1848年2月の『共産党宣言』は，人類がはじめて目的意識的に理想の社会，すなわち共産主義社会の実現をめざすことを声明した画期的文献であった。

それから144年後の1992年4月，金日成主席の生誕80周年慶祝行事に出席のため世界の各地から朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮または共和国と略称）の首都平壌を訪れた社会主義を志向する70の政党の代表者たちが，平壌滞在中に接觸を重ね，4月20日に「社会主義偉業を擁護し前進させよう」という宣言を発表した。

この『平壌宣言』に賛同した政党数は次第に増加し，約半年後の12月23日現在で153を数えるにいたった。

その全文は次の通りである。

「社会主義勝利をめざしてたたかう世界各国の政党代表は，社会主義偉業を擁護し前進させ

る確固たる信念のもとにこの宣言を発表する。

現代は自主性の時代であり，社会主義偉業は人民大衆の自主性を実現するための神聖な偉業である。

近年，一部の国で社会主義が挫折した事態を前にして，帝国主義者と反動はあたかも社会主義が「終末」を告げたかのように喧伝している。これは，資本主義を美化粉飾し，旧秩序を庇護しようとする奇弁に過ぎない。一部の国で社会主義が挫折し資本主義が復帰したのは，社会主義偉業実現で大きな損失となるが，それは決して社会主義の優位性と資本主義の反動性を否定するものとはならない。

社会主義は以前から人類が憧れてきた理想であり，人類の未来を代表する社会である。

社会主義は本質において，人民大衆がすべての主人となり，すべてが人民大衆のために服務する真の人民の社会である。

カネがすべてを決定する資本主義社会は，人間による人間の搾取が支配し，極少数の搾取階級が主人のように振る舞う「富益富」「貧益貧」の不公平な社会であり，政治的無権利と失業と貧窮，麻薬と犯罪，人間の尊厳を蹂躙するあらゆる社会悪を必然的に伴う。

唯一，社会主義だけがあらゆる形態の支配と従属，社会的不平等をなくし，人民に実質的に自由と平等，真の民主主義と人権を保障することができる。

人民大衆は社会主義の勝利をめざして長期間厳しいたたかいを繰り広げ，血も多く流した。

社会主義の道は前人未到の道であり，従って前進途上に難関や試練があって当然だ。

一部の国で社会主義建設がうまくゆかなかったのは，それらの国で人民の根本要求に合う社会構造を樹立できず，科学的社会主義理論の要求に合わせて社会主義を建設できなかったことにその原因の一つがある。社会主義社会の前進の保証は，人民大衆を社会の真の主人にすることである。こうした社会は勝利のうちに前進するというのが，理論上からも実践上からも示す真理であり現実である。

社会主義を志向する党と進歩的人類は，実に貴重な教訓を見出した。社会主義偉業を擁護し前進させるためには，各党が自主性を確固と堅持し，自らの力量をしっかりと築かなければならない。

社会主義運動は自主的運動である。社会主義は国と民族国家単位で開拓され建設される。各国における社会主義偉業は，その国の党と人民が責任をもって遂行しなければならない。

各党は自国の実績と人民の要求に合う路線と政策を立て，それを人民大衆に依拠して貫徹しなければならない。

各党はいつ，いかなる環境の中でも革命的原則を捨ててはならず，社会主義の旗じるしを高く掲げてゆかなければならない。

社会主義偉業は民族的偉業であると同時に，人類共同の偉業である。

すべての党は自主性，平等の原則で，同志的団結と協力，連帯の絆を強化しなければならな

い。

社会主義をめざすたたかいで国際的団結は必須である。

国際的に帝国主義と反動が連合し，社会主義と人民を攻撃している状況で，社会主義を建設する党と社会主義を志向する党は，国際的範囲で社会主義を擁護し前進させ，また帝国主義支配と資本の従属，新植民地主義に反対し，社会的正義と民主主義，生存権と平和をめざすたたかいで，相互支持と連帯を強化しなければならない。

こうすることが，社会主義をめざすすべての党と進歩的勢力に提起される国際的義務であると同時に，自らの偉業のためのものである。

われわれは，社会主義を固守し，資本主義と帝国主義に反対してたたかう世界のすべての進歩的政党，団体，人民と固く団結し，社会主義の旗じるしを高く掲げて前進するだろう。

みな社会主義偉業に対する確固たる信念をもって，人類の未来を開拓するため最後までたたかおう。

終局的勝利は，社会主義をめざし団結してたたかう人民にある。社会主義偉業は必勝不敗である。」

『平壌宣言』は，「社会主義偉業は人民大衆の自主性を実現するための神聖な偉業」であり，「社会主義は本質において，人民大衆がすべての主人となり，すべてが人民大衆のために服務する真の人民の社会」であり，「社会主義の前進のための保証は，人民大衆を社会の真の主人にすること」であると，社会主義の本質を人民大衆中心の観点から明らかにし，人民大衆中心の社会主義理念を明確に提示した。

『共産党宣言』が，西欧の資本主義諸国において，資本の搾取と抑圧からの解放を求める労働者階級の要請に応えて，マルクスとエンゲルスが，マルクス主義を創始し，党を結成して社会主義・共産主義をめざすたたかいにプロレタリアートが立上ることをよびかけた歴史的文献であったのにたいし，『平壌宣言』は，人民大衆が『共産党宣言』以降，幾多の困難なたたかいを経て，社会主義社会を世界的範囲で実現したにも抱らず，一部の社会主義諸国が挫折し変質した状況のなかで，朝鮮の首都平壌で，世界の進歩的政党が国際主義にもとづく団結と連帯を強め，社会主義のための新たなたたかいに立ち上がることをよびかけた歴史的文献である。

1840年代，西欧の資本主義諸国で，賃金労働者階級は，資本の搾取と抑圧からの解放を求めて立ち上がりつつあったが，この労働者階級の解放闘争の先頭に立ってたたかったのがマルクスとエンゲルスであった。

彼らは1847年から48年の初めにかけて労働者階級の政治組織である共産主義者同盟のために，共産主義とは何であり，その目標と当面の政策がどのようなものであるかを明らかにした綱領的文献を執筆し，パリの2月革命勃発の直前に『共産党宣言』として公表した。

『共産党宣言』はその冒頭で次のように述べている。

「一つの妖怪がヨーロッパにあらわれている――共産主義の妖怪が。旧ヨーロッパのあらゆ

る勢力が，この妖怪にたいする神聖な計伐の同盟をむすんでいる。法王とツアーリ，メッテルニヒとギゾー，フランスの急進派とドイツの官憲も。」

共産主義に対し，旧ヨーロッパの反動諸勢力は討伐の同盟を結んだが，彼らの目に妖怪と映じた共産主義とは何であるかを科学的に明らかにしたのは『共産党宣言』である。

マルクスの科学的共産主義理論は，その後の歴史において現実の目程にのぼるようになった。

金正日書記は，マルクスの死後100年を記念する論文で次のように述べている。

「マルクスによって科学的共産主義理論が創始されて以来，人類は共産主義理想社会の実現をめざして間断なき闘争を展開し，今日にいたって共産主義は遠い未来の願望でなく，現実的な課題として歴史の目程にのぼった。」(「マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう」1983年5月2日)

マルクスは『共産党宣言』のなかで，「今日ブルジョアジーに対立しているすべての階級のなかで，ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級である」こと，すなわち生産手段の所有者であり，賃金労働者の雇傭者であるブルジョア階級に，革命的に対立する階級は，自分自身の生産手段をもたず，生きるためには自己の労働力を売るほかにはない近代的賃金労働者階級だけであることを明らかにした。

『共産党宣言』が発表されてから69年後の1917年10月，世界で最初の社会主義国家がレーニンの指導のもとで，第1次世界大戦の末期に出現し，やがて第2次世界大戦後，社会主義諸国は世界的範囲で出現し，その優位性を発揮した。

金正日書記は次のように述べている。

「人民大衆は長期にわたり搾取と抑圧のない自主的な新しい社会を願ってきたし，その実現のために困難なたたかいを繰り広げてきました。その過程で社会主義・共産主義学説であるマルクス主義が発生し，それを指針にしてたたかった結果，社会主義10月革命が勝利できました。その後，社会主義は世界的な規模へ拡大され，社会主義諸国では歴史的に短期間で資本主義の下では数百年かかっても達成できない大きな社会経済的発展を遂げました。こうした歴史発展の過程は，社会主義理念が正当であり，社会主義が資本主義に比べようもない大きな優位性をもっていることを示しました。」(「社会主義建設の歴史的経験とわが党の総路線」1992年1月3日)

にも拘らず，1980年代の末頃からソ連，東欧の社会主義諸国はつぎつぎと崩壊した。

帝国主義者と反動勢力は，マルクス・レーニン主義と社会主義理念は完全に敗北したのであり，そもそも社会主義革命自体が誤りであったとして，歴史発展の方向は変わり，社会主義は「終末」を迎えたと喧伝した。

いまや帝国主義者は，挫折崩壊した社会主義諸国で資本主義を復帰させる一方，これを機会に，社会主義の旗を掲げて進む国々に攻撃の矛先を向け，社会主義を地球上から完全に抹殺しようと策動している。

このため，ソ連，東欧諸国の社会主義の挫折崩壊の真相，その根本的原因を正しく理解でき

ない一部の人びとのなかには，社会主義は現実には成功することのできない夢にすぎなかったのであろうか，という動揺も生まれた。

『平壌宣言』は，まさにこのような状況のなかで，社会主義の本質を人間中心の観点から明らかにして，終局的勝利は人間中心の社会主義をめざして団結してたたかう人民にあることを力強く声明したのである。

『平壌宣言』は，資本主義でなく，社会主義だけが，人民大衆に真の自由と平等，真の民主主義と人権を保障することができる社会であることを改めて指摘し，社会主義こそが人類の未来を代表する社会であり，人類が社会主義へ進ことは阻むことのできない歴史発展の法則であり，社会主義の発展過程には迂余曲折はあっても，社会主義へ向う歴史発展の方向は不変であり，終局的勝利は社会主義をめざしてたたかう人民大衆にあることをあらためて宣言したのである。

金正日書記は次のように述べている。

「平壌宣言は，社会主義は人類の理想であり，人類の未来を代表する社会，真の人民の社会だということを確言した。社会主義思想は労働者階級の階級的理念であるが，ある階級の利益だけを代表する思想ではなく，人間の社会的本性を反映した人類の普遍的な思想であり，階級解放の思想であるばかりか，全民族と全人類の自主的志向を反映した民族解放，人類解放の思想である。人民大衆がすべての主人になり，すべてが人民大衆のために服務する社会主義の道に進んでこそ，すべての人民が人間の自主的本性に見合った自由で平等で尊厳ある人生を送り，すべての国と民族があらゆる支配と隷属から抜け出して自主的な発展を遂げることができ，人類の生存と発展が約束された世界の恒久的平和と安全を保障できる。

『平壌宣言』は社会主義偉業の真理性と正当性，その終局的勝利の必然性を確認することによって，自主性を志向する世界の革命的人民には勝利の信念と革命的闘志を与え，社会主義の「終末」について騒ぎ立てながら，反社会主義に狂奔する帝国主義者と反動勢力には大きな打撃を与えている。」（「革命的党建設の根本問題について」1992年10月10日）

『平壌宣言』は，帝国主義者の反社会主義攻撃にたいして，社会主義を志向する党，社会主義を建設している党は，国際的に団結しなければならないことを既に紹介したように強調している。

金日成主席は，早くから社会主義の終局的勝利のために，社会主義陣営の統一と団結の強化が必要であることを次のように述べている。

「国際資本主義の包囲のなかでプロレタリアートが権力をにぎった個々の国ぐには，全世界的規模で共産主義が実現するときまで，帝国主義の侵略と資本主義復活の危険をまぬがれることができません。それゆえ，権力をにぎった個々の国のプロレタリアートが革命の終局的勝利をかちとるためには，みずからの主体的革命力量をあらゆる面から強めるとともに，世界社会主義革命の他の部隊の積極的な支援をうけなければならず，万国の労働者階級と全世界の被抑

圧人民との真の国際主義的連帯を強めなければなりません。

ここで社会主義陣営の形成とその拡大，発展は，大きな意義をもっています。労働者階級の歴史的使命は，全世界的範囲であらゆる搾取制度を一掃し，人類の最高の理想である社会主義・共産主義を建設することであります。世界革命の終局的勝利は，各国で社会主義革命がおこって完全に勝利し，しだいに社会主義陣営が拡大され，強化，発展する過程をつうじて達成されるのであります。社会主義陣営は，社会主義・共産主義の終局的勝利のための国際労働者階級の不敗の革命基地であり，全世界の被抑圧人民とすべての進歩的な人民の勝利のたのもしいとりでであり，世界平和の威力ある要塞であります。」(「チョソン民主主義人民共和国は，わが人民の自由と独立の旗じるしであり，社会主義・共産主義建設の強力な武器である」1968年9月7日)

もちろんそれぞれの社会主義国は，自国の実情にそって自力で社会主義建設を行うべきであり，社会主義の旗じるしを高く掲げて進む世界各国の共産党，労働党をはじめすべての進歩的政党は，自主的立場で自国の政治，経済，社会，文化的条件にそって政策を作成し，自己の陣地を確固と築くと共に，相互尊重，内政不干渉の原則を堅持しなければならないことはいうまでもない。しかしそれと同時に共通した社会主義理念に基づいて国際主義的団結と連帯を強め，全世界を自主化する使命達成のために手をとり合ってたたかうべきである。

金正日書記も次のように述べている。

「平壌宣言に著名した党が百数十に達し，世界の革命的人民が宣言に熱烈な共感を示している事実は，平壌宣言で明らかにされた社会主義思想が進歩的人民の志向と念願を反映した思想であるということを力強く確証している。平壌宣言を共同の闘争綱領に掲げてたたかう時，革命的党は共通の思想的理念にもとづいた国際主義的団結と連帯をより固くし，社会主義偉業を力強く前進させることができるであろう。」(「革命的党建設の根本問題について」)

世界の進歩的党が連帯し，団結して闘うことは，全世界の進歩的人民が団結し，連帯して帝国主義とたたかうための保障である。

『共産党宣言』でマルクスとエンゲルスは「万国のプロレタリア団結せよ！」とよびかけたが，金正日書記は「革命的党建設の根本問題について」で，「自主性を擁護する世界人民は団結しよう！」とよびかけ，「これこそがわが時代のすべての人民が共同で掲げるべきスローガンである」と述べ，「社会主義諸国と国際共産主義運動および労働運動，民族解放運動，非同盟運動，世界の平和愛好運動をはじめ，すべての反帝自主勢力が団結して闘うならば帝国主義の支配と干渉を終らせ，自主的な新しい世界を創造できる」と述べている。

なお『平壌宣言』で注目しなければならないことは，昨年の4月20日現在で，挫折した社会主義諸国のなかから旧ソ連邦ボリシエビキ共産党，ロシア共産主義労働者党，ロシア社会主義勤労者党，ロシア共産主義者同盟，ルーマニア新社会党，ポーランド共産主義者同盟，共産主義者同盟——ユーゴスラビアのための運動，アルバニア社会労働党などが参加していることである。

金正日書記は，「各国で社会主義執権党が崩壊し，社会主義制度が崩れたのは，人民大衆の自主偉業の遂行で大きな損失となる。しかし，失敗から教訓を見つけ，自主的に，創造的に党建設の革命的な道を開拓して行くならば，より革命的で戦闘的な党を建設することができるであろうし，党の指導のもとに社会主義偉業を限りなく前進させることができるであろう」（同上）と述べているが，社会主義建設で失敗した一部の国のでは，自国の社会主義の崩壊のなかから教訓をくみとり，人民大衆中心の真の社会主義の再生をめざして立ち上っているのである。

1992年10月，ロシア連邦共産主義ボルシエビキ党中央委員会のニーナ・アンドレーエワ書記長は，金日成総合大学での講演「社会主義偉業は必勝不敗」のなかで，最近ソ連で社会主義に資本主義を受け入れ，社会生活のすべての分野で資本主義的関係を復帰させるまでに移行したブルジョア反革命が起こったと指摘し，ソ連と東欧諸国で社会主義が挫折し後退した根源と原因に言及して，三つの問題点をあげて次のように述べている。

第1に，ソ連で社会主義が敗れたのは偶然の現象ではない。しかし反革命が完全に，最終的に勝利したのでもない。帝国主義者と反動がどんなに策動しようとも，歴史の全般的流れは変わりなく封建主義，資本主義を経て社会主義に進んでおり，必ず帝国主義の牙域を一掃してしまうだろう。誰も歴史の車輪を押し戻すことはできない。

第2に，厳密に言って，ソ連で社会主義・共産主義思想が歴史的に失敗したのではなく，偽善的に政権を強奪した日和見主義が敗北したのである。

レーニンとスターリンは，資本主義包囲の圧力に屈服してはだめだということと，社会主義国で民族主義の危険性が有り得るということについて警告した。しかし，この警告が考慮されなかったのである。

第3に，日和見主義者，背信者が復帰させた資本主義は，人類の直面している問題を何一つ解決できないということである。

そして，今日，帝国主義のいわゆる《勝利》は幻想的なものであり，より深刻な危機，世紀的な矛盾の激化，世界の分割のための闘争の火種を抱いている。

社会主義は戦争の危機，そして生態学分野，経済分野，人種分野，その他の分野で来たる世紀的な危機から世界各国の人民を救うことのできる唯一の機会である。

そしてニーナ・アンドレーエワ書記長は，今や世界社会主義と革命運動の中心は，アジアとラテンアメリカに移ったと指摘し，平壌宣言の採択は国際的範囲で社会主義の後退が終り始めており，帝国主義に対する反撃を準備し，実現する問題が日程にのぼったことを意味すると述べ，さらに朝鮮式社会主義は実践を通じて自己の生活力を証明し，未来に対する確信を与えてくれた，と強調した。

最後に『平壌宣言』が朝鮮の首都で発表されたことのもつ意義をわたしは，ここで強調しなければならない。

1992年4月，東京で開かれた「現時代とチュチェ思想にかんする国際セミナー」に出席した，

ロシア現代社会問題大学教授ドタミトゥリ・ヴァディモヴィッチ教授は，「これまで社会主義思想が数多くありましたが，最高の社会主義思想は，チュチェ思想であると思います。将来そうなっていくでしょう」と述べて，チュチェ思想が，人類の進むべき道を示す最高の社会主義思想であることを強調している。

『平壌宣言』が，金日成主席の賢明な指導のもとに，また主席の指導を継承した金正日書記の精力的な卓越した指導のもとに，共産主義史上もっとも強固な生命力のある，領袖・党・大衆の統一体である社会的政治的生命体を確立して人民大衆中心の社会主義を建設している朝鮮の首都平壌で発表されたことのもつ意義は極めて深いものがある。

以下マルクス主義の創始から現段階にいたるまでの社会主義の流れを簡単に考察しよう。

Ⅱ　マルクスとエンゲルスによる社会主義・共産主義学説の創始

社会主義を「空想から科学へ」と発展させたのは，マルクスとエンゲルスである。

ブルジョア革命によって封建的身分制度が撤廃され，イギリスをはじめとする西欧資本主義社会が出現する過程は，同時に資本主義的搾取制度に反対する賃金労働者階級が歴史の舞台に登場する過程であった。

賃金労働者階級は，資本主義制度を廃止して資本の搾取と抑圧から解放されることを切望し，そのための革命思想を求めた。この労働者階級の要求する革命思想は，マルクス（1818年～1883年）とエンゲルス（1820年～1895年）によって創始された。

彼らは観念論と形而上学を否定して唯物論と弁証法を勝利させ，社会発展の法則を唯物史観として定式化した。また剰余価値を利潤，利子，地代として搾取する資本主義的生産の秘密を暴露し，資本主義の死滅と社会主義の必然性を理論的に解明し，社会主義・共産主義を空想から科学へと発展させたのである。

まさに「マルクスの卓抜な功績によって労働者階級は初めて，科学的世界観をもって社会発展の法則を把握し，階級的解放の実現と明るい新社会建設の前途を見通すようになった」（「マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう」1983年5月3日）のである。

マルクスは『フオイエルバッハにかんするテーゼ』のなかで，「哲学者は世界をたださまざまに解釈してきただけである。しかし肝腎なのはそれを変えることである」と述べており，レーニンもマルクス主義から革命的実践的契機を除いたとき，それはもはやマルクス主義ではなく，マルクス主義の抜け殻にしかすぎないことを力説しているが，マルクス主義に革命的実践，社会変革の特徴を与えているのは，その社会主義・共産主義理論である。

マルクスとエンゲルスは資本家階級を打倒して，社会主義・共産主義を実現することがプロレタリアートの歴史的使命であり，プロレタリアートだけが，ブルジョア国家およびその経済的基礎である生産手段の資本家的所有を粉砕して社会革命を実現し，自己自身を解放することによって全人類を解放するという歴史的使命をもつ階級であることを明らかにした。

プロレタリアートは，他のあらゆる人びとを解放することなしには，自分自身を解放することのできない特殊な階級であるという見解を，マルクスは早くも『ヘーゲル法哲学批判序説』(1843～4年）で述べているが，マルクスが初めてプロレタリア革命論を提起したのもこの著者においてであった。そのごマルクスとエンゲルスは『聖家族』(1845年2月）で，階級としてのプロレタリアートがもつ人類解放の世界史的使命についての見解を大体において仕上げたのである。

プロレタリアートの歴史的使命をマルクスは『哲学の貧困』(1847年）で次のように述べている。

「労働者階級の解放の条件，それはあらゆる階級の廃止である。……労働者階級は，その発展の過程において，諸階級とその敵対関を排除する一つの共同社会をもって，ふるい市民社会階級におきかえるであろう。」

ではプロレタリアートはどのようにして自らを解放し，それを通じて人類を解放することができるのであろうか。

それはまずプロレタリアートが政治権力を奪取することによってである。

マルクスは『ドイツ・イデオロギー』(1845～6年）で次のように述べている。

「支配をめざす各階級は，たとえその支配がプロレタリアートの場合がそうであるように，旧社会形態全体と支配一般との廃止をもたらす場合でも，その階級の利害をやはりまた普遍的なものとして示すためには……まず何よりもさきに政治権力を奪取しなければならないということである。」

マルクスとエンゲルスは，既述のように彼らの社会主義・共産主義理論を1848年に『共産党宣言』として発表した。

『共産党宣言』は，「1．ブルジョアとプロレタリア」，「2．プロレタリアと共産主義者」，「3．社会主義的および共産主義的文献」，ならびに「4．種々の分野に対する共産主義者の立場」の4章からなっており，はじめの二つの章にマルクスとエンゲルスの共産主義理論が積極的に述べられている。

『共産党宣言』は，第1章の冒頭で，「今日までのあらゆる社会（但し当時は原始の無階級社会については知られていなかった）の歴史は階級闘争の歴史である」と述べ，ブルジョア階級は大工業の発展とともに「かれら自身の墓掘人を生産する。かれらの没落とプロレタリア階級の勝利はともに不可避である」ことを確言している。

第2章ではプロレタリア階級の利益を代表する共産主義者の任務を，共産主義への種々の反論や疑問にかかわらせて解明している。この章でマルクスとエンゲルスは「労働者革命の第1歩は，プロレタリア階級を支配階級にまで高めること，民主主義を闘いとることである。……プロレタリア階級は，その政治的支配を利用してブルジョア階級からしだいにすべての資本を奪い，すべての生産手段を国家の手に，すなわち支配階級として独裁されたプロレタリア階級

の手に集中し，生産諸力をできるだけ急速に増大させるであろう」と述べている。

ところでマルクスは『共産党宣言』でまだ「プロレタリアートの支配階級への転化」と「民主主義の獲得」と述べているだけで，「プロレタリアートの独裁」とは述べていない。しかしエンゲルスが後に指摘したように，『共産宣言』で事実上プロレタリアート独裁を宣言しているのである。なぜならプロレタリアートが支配階級となり，真の民主主義を獲得するということがプロレタリア独裁だからである。

マルクスが「プロレタリアート独裁」とはじめて述べたのは1848年から1849年まで」と題して『新ライン新価』に掲載された三つの論文をまとめた著作『フランスにおける階級闘争』においてであった。

マルクスは，プロレタリアート独裁に限らず，ブルジョア議会制をも含めて，すべての政治支配の本質が「独裁」であることを明らかにした。彼はドイツの1848年３月革命の失敗の原因は，旧機構に手をふれなかったからだとして，「独裁」や「旧国家の粉砕」の必要について述べているが，この場合の独裁はブルジョアジーの独裁であり，旧封建国家の粉砕である。

マルクスとエンゲルスの死にいたるまでの二人のプロレタリア革命とプロレタリアート独裁の理論は，各国の階級闘争，とりわけフランスにおける階級闘争の研究の総括にもとづいて仕上げられた。前記の『フランスにおける階級闘争』と『ルイ・ボナパルトのブリューメール18日』（1851年12月執筆）ならびにパリ・コミューンの経験を検証し，深めた『フランスにおける内乱』（1871年５月）の三部作は，マルクスのプロレタリア革命論，社会主義理論の深化の過程を示している重要な文献である。

マルクスは『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の原稿をワイデマイヤーが編集する雑誌『革命』に送った直後のワイデマイヤー宛書簡（1852年３月５日）のなかで自己の理論的貢献を次の３点を明らかにしたことであると述べている。

「(１)諸階級の存在は生産の一定の歴史的発展段階とのみ結びついていること，(２)階級闘争は必然的にプロレタリアート独裁に導くということ，(３)この独裁そのものは，一切の階級の廃止への，階級のない社会への過渡をなすにすぎない，ということを証明したことだ。」

レーニンは『国家と革命』（1817年９月）で「国家の問題におけるマルクス主義の最も注目すべき，最も重要な思想の一つは『プロレタリアート独裁』の思想である」と述べている。

マルクスとエンゲルスは，上記の三部作で，プロレタリアートが自らを解放し，人類を解放するためには，プロレタリアートは政治的権力を奪取しなければならないと結論した。また「労働者階級は既成の国家権力をそのまま奪いとって，それを自分自身の目的のために使うことはできない」のであって，「旧国家機関を粉砕しなければならない」と結論した。この旧国家機関粉砕の思想は，『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』を経て『フランスの内乱』で結実したものである。

マルクスのプロレタリアート独裁の思想が歴史の実際においてどのような形で実現されるの

かを示したのはパリ・コミューンにおいてであった。

1870年7月19日，フランス皇帝ナポレオン三世は，プロイセン（国王ウィルヘルム一世）に戦いを宣し，ビスマルクを敵とした。翌年1月末，数カ月の包囲ののちパリは降伏した。しかし3月18日敵，味方ともに驚くべき事件が一挙に起った。パリの市庁舎に労働者の赤旗がひるがえったのである。

プロイセンの侵略者にたいする防衛の最前線に立っていたパリの労働者は降伏後も彼らの武器を手離さなかった。不安にかられたフランスの大ブルジョア政府は，パリの労働者から火砲をとりあげることを軍隊に命令したが，パリの労働者は妻たちとともに自らの武器を守った。事件が矢つぎばやにおこり，フランス政府は，ヴェルサイユに逃亡した。1871年3月26日，最高権力機関としてのコンミューン市会が選出され，2日後に市庁舎前で盛大な大衆集会が開かれ，コンミューンが布告され，歴史上はじめて労働者階級が権力を握ったのである。

マルクスは1870年9月9日のインターナショナルの宣言のなかで，フランスのプロレタリアートに時期をえない蜂起に立ち上がらないよう警告していたが，それにも抱らず翌年蜂起がおこったとき「天をもおそおうとする」大衆の革命的創意を熱狂して歓迎した（マルクスのクーゲルマン宛手紙）。こういう情勢のもとでは，既得の陣地を闘わず放棄するより，革命的敗北がよいとして，いまやマルクスとエンゲルスはコンミューン戦士の側に立ったのである。

パリ・コミューンの無名の社会主義者たちは，理論的，思想的には多くの根本的欠陥をもちながらも，革命闘争によって社会を根底から変革するために死を賭して闘った。パリ・コミューンは理論的思想的に統一された人びとによる革命ではなかった。

しかしマルクスは『フランスの内乱』で，パリ・コミューンについてこう書いている。

「それは本質的に労働者階級の政府であり，横領者階級にたいする生産者階級の闘争の所産であり，労働の経済的解放をなしけげるための，ついに発見された政治形態であった。」

マルクスが1848年革命の階級闘争で到達したいた，プロレタリアートは政治権力を獲得したのち，古いブルジョア国家機構を単に受けつぐことはできず，プロレタリアートがみずからつくり出した彼ら独自の国家機構によってとりかえなければならないという認識は，パリ・コミューンによって，はじめて実際に確証されたのである。

すなわち，すべての人民代表は選挙によってえらばれること，人民代表は報告義務をもち，また解任されること，議会を人民大衆の真の代表に変えること，および立法権と執行権の結合，これらをマルクスは新しいプロレタリア国家の決定的な標識とみたのである。そしてこれらはみなプロレタリアート独裁の具体的形態である。

パリ・コミューンは，上記の新しいタイプの国家への途上を数歩ふみ出すことしかできず敗北した。三万人のコミューン戦士は殺され，六万人が投獄されるかあるいは囚徒として植民地での強制労働に送られ，死を迎えた。

パリ・コミューンの経験は，革命は科学的綱領にしたがって行動する党なしには勝利するこ

とが不可能であることを教え，また労働者階級が勝利するためには，またその勝利を打倒されたブルジョアジーから守ためには，プロレタリアートは，その他の勤労者，とくに勤労農民と緊密に同盟しなければならないことを教えたのである。

パリ・コミューンはプロレタリアートの独裁の不可欠であることを教えた。

プロレタリアート独裁は搾取階級に対する鎮圧であると同時に，人民大衆に対しては真の民主主義を実施するという二重の役割，二つの側面をもっている。

金日成主席は次のように述べている。

「周知のように，プロレタリアート独裁は少数の敵対分子は鎮圧し，労働者階級と農民をはじめ絶対多数の勤労人民には民主主義を実施します。プロレタリアート独裁のこの二つの側面を正しく結合してゆくということは，絶対多数の人民大衆を教育し改造して団結させる活動と，ごく少数の敵対分子の陰謀策動に反対する階級闘争を正しく結合させていくことを意味します。」(「朝鮮民主主義人民共和国は，わが人民の自由と独立の旗じるしであり，社会主義・共産主義建設の強力な武器である。」)

マルクス主義の社会主義・共産主義学説を継承し，それを帝国主義段階で発展させ，「一国社会主義」を実現して，マルクスとエンゲルスの理論を現実のものとしたのはレーニンである。

Ⅲ　レーニン主義と10月社会主義革命の勝利

マルクスは資本主義が社会主義にとって代えられる必然性を科学的に解明したが，当時の西欧におけるプロレタリア革命の見通しについては誤まった予測をした。

『フランスにおける階級闘争』でマルクスは「ヨーロッパ同時革命」なしにはフランス革命は成功しないと述べた。すなわち彼は「共産主義革命は決して単に一国だけのものではなく，すべての文明国で，いいかえるとすくなくともイギリス，アメリカ，フランス，ドイツで同時におこる革命となるだろう」とこれら諸国の同時的，継続的革命を予測したのである。しかし社会主義革命は，周知のようにマルクスの死後34年を経過した1917年11月７日（ロシアの旧暦では10月25日），レーニンの指導によって帝政ロシアで一国社会主義革命として勝利した。

第１次世界大戦に参加したロシアでは，戦争による被害と飢えの深刻化のなかで，労働者，農民，兵士をはじめとする人民大衆は，パンと平和を求めた。レーニンはロシア社会民主党内のボルシェヴィキ派をひきいて，前衛党の厳格な規律を守り，大衆運動を指導した。

1917年の２月革命でツアーの専政政治は打倒され，ブルジョア政府が成立したが，労働者たちの貧困と無権利状態はいぜんとして続いていた。1914年からの大戦は前線の兵士に飢えと疲労を与え，人民大衆も冬の寒さをしのぐ靴さえ不足し，パンの配給は一日700グラムから 300グラム，100グラムと低下し，牛乳，砂糖，タバコを手に入れるには長い行列をつくらなければならなかった。

社会民主労働党は1903年，ボリシェビキとメンシェビキに分裂し，レーニンの率いるボリシェ

ビキは，労働者，農民，兵士の要求を取りあげ，当面の綱領を作成した。メンシェビキとエスエル（社会革命党）が臨時政府を擁護し，ブルジョア政府との妥協にうき身をやつしているあいだに，ボルシェビキは急速にロシアの大衆の心をとらえた。たとえば，モスクワの市会選挙でメンシェビキ，エスエルは6月には70％の支持を得ていたが，9月には18％に下落した。これにたいして6月に第4党だったボリシェビキは9月には第1党に進出したのである。

革命勢力の伸長に気付き，これを阻止しようとした地主，資本家などの有産階級は，工場委員会をつぶすために工場を閉鎖し，前線の軍隊委員会を破壊するために死刑を復活し，戦争の軍事的敗北は黙認され，前線には補給物資すら送られなかった。前線で，工場で，街頭で，戦争終結を求める声が高まった。

工場では工場委員会が旧秩序とたたかい，農民は地主とたたかい，前線では兵士が将校とたたかって，自分たちの委員会をとおして自治的に活動した。

工場委員会協議会は次のことを採択した。

「労働者管理は，自己本位の物質的，政治的な利益に従う工場主の独裁的な判断よりも，社会全体の利益，全人民の利益を保証するところが大きい。それゆえ，プロレタリアートの要求であるだけでなく，国全体の利益にもかない，革命的農民と，革命的軍隊によってかならず支持されるだろう。」

兵士は「土地が農民のものとなり，工場が労働者のものとなり，権力がソビエトのものとなったときこそわれわれは，自分たちの闘いの目的を知るだろう。そしてその目的のために闘うだろう」と訴えた。かくして11月7日，労働者，農民，兵士は決起し，革命は勝利したのである。

ソビエト第2回全ロシア大会は権力を掌握し，以下の宣言を発した。

1．ソビエト政権は，すべての国に向かって即刻の民主的和平と全戦線における即時停戦とを提唱する。

2．ソビエト政権は，地主，帝室領，教会領の土地を土地委員会へ無償で委譲することを保証する。

3．兵士の権利を擁護して軍隊の完全民主化を強行する。

4．生産の労働者管理を確立し，都市にはパンを，農村には生活必需品を供給する手段をこうずる。

5．ロシア在住のすべての民族に真の自決権を確保する。

また，ソビエト政権は，土地に関して，兵卒の農民と，兵卒のコサックの土地は没収されないことも保証した。実に1億5千万ヘクタールの土地が農民に解放されたのである。

また資本家などから没収した財産は全人民の所有となった。

しかし10月革命後の道のりは決して平坦ではなかった。帝国主義からの革命にたいする干渉圧迫，メンシェビキらの執ような妨害が続いたのである。

しかしレーニンは，パリ・コミューンの経験を分析したマルクスの教訓を参考にしてブルジョ

ア国家を破壊し，新しく成立したソビエト権力のもとで真に民主主義的な人民の国家を建設しようとした。

レーニンが樹立したソビエト権力は，マルクスのプロレタリアート独裁の理論を継承したものであり，ソビエト権力はプロレタリアート独裁のレーニンによる具現である。

レーニンは，①ソビエト権力は各地域における人民大衆の下からの創意を自己の権力の源泉として民主主義的中央集権制を確立すること，②人民によって選挙され，人民によってリコールされる人民代表制，③官吏もすべて人民によって選挙され，リコールされること，④人民から切り離され，人民に対立する機関としての警察・軍隊の廃止と人民自身の警察・軍隊の創設，を実現しようとした。

しかし，ソビエト権力を真に人民の権力とし，人民大衆自身が国家と社会の真の主人となるためには，人民自身が，主人としての地位を占め，役割を果すことができるように成長しなければならない。

だが，当時のソ連の人民大衆の政治的，思想的，文化的水準は低かった。したがってやはり一部の先進的な活動家が大衆の先頭に立たなければならなかった。

レーニンは第8回党大会の演説（1919年4月）で「ソビエトが，われわれの綱領では勤労者による管理機関であるのに，事実の上では，プロレタリアートの先進的な層による勤労者のための管理機関であって，勤労者大衆によるそれになっていないのは，この低い文化水準のしからしむるところである」となげいている。

革命成功当時のロシアでは，工場労働者は約1割強にしかすぎず，きのうまで農奴であった農民が約9割近くを占め，文字を書けない人が圧倒的多数であった。レーニンがもっとも頭を悩ましたのは，この人民大衆の教育文化水準の低さだったのである。

明らかに当時の農民の大多数は，地主から土地をとりかえし，自分の土地がもてるようになり，生活していけるようになればそれで満足だと考えていたであろう。したがって社会主義社会をいかにして建設するかという問題を，主体的に考えるまでにはいたっていなかったであろう。

レーニンは，労働者，農民の思想意識水準をいかにして高めるか，について真剣に考慮しながら，この課題を胸にしたまま惜しくも世を去った。しかし，今日マルクス・レーニン主義として高く評価されているように，レーニンの偉大なる人類への寄与は人びとの胸中に残っている。

金正日書記は，マルクス，エンゲルス，レーニンの歴史的功績について次のように述べている。

「百数十年にわたる共産主義運動の歴史は，労働者階級の領袖が革命思想を創始し発展させてきた歴史であり，その具現によって世界が変革されてきた歴史である。19世紀の中葉にマルクスとエンゲルスはマルクス主義を創始することにより，闘争舞台に登場した労働者階級の歴

史的使命と解放の道を明示してブルジョアジーに反対する闘争をおしすすめ，国際共産主義運動の始原をきりひらいた。

レーニンは資本主義が帝国主義の段階に移行した新たな歴史的条件に即してマルクス主義を発展させレーニン主義を創始することにより，帝国主義の牙城を粉砕し，自由と解放をめざす闘争に労働者階級と人民を奮いたたせ，資本主義から社会主義への移行の端緒をきりひらいた。」（「チュチェ思想について」1982年3月31日）

帝国主義者と反動勢力がマルクス・レーニン主義をことあるごとに攻撃していることこそ，その正しさの証明である。

Ⅳ　社会主義の世界的規模での成立とソ連，東欧の社会主義の崩壊

レーニンのあとをついたスターリン（1879年～1953年）は，資本主義諸国が不況のなかで沈滞していた1930年代に，一国社会主義の発展をめざして第1次，第2次の5カ年計画によって重工業を大きく成長させ，第2次世界大戦を闘い抜いて反ファシズム戦争の勝利に貢献し，戦後はスプートニクの打ち上げをはじめ，科学技術の多くの分野で世界をリードする成果をあげ，世界第2位の工業国として二つの超大国の一方の地位を占めるにいたった。

また第2次世界大戦後，東欧諸国が，ソ連の政治的，軍事的，思想的な影響を多かれ少なかれうけて社会主義への道を進むようになり，またアジアでは，朝鮮民主主義人民共和国，中華人民共和国が社会主義国となり，「一国社会主義」の時代は終り，社会主義は世界にまたがる体制となった。すなわち地球上の約4分の1の地域に，人口にして世界人口の3分の1弱という大きな社会主義圏を形成したのである。

社会主義諸国が世界で大きな重要性をもっていたことは次の表の示す通りである。

世界の領土・人口・工業生産高　（1974年6月末現在）

	領土 100万平方キロ（%）	人口 100万人（%）	工業生産高* （%）
世界全体	135.8（100.0）	3,940（100.0）	（100）
社会主義国	35.2（ 25.9）	1,259（ 32.0）	（ 40）
その他	100.6（ 74.1）	2,681（ 68.0）	（ 60）
資本主義国	32.6（ 24.0）	730（ 18.5）	（ 53）
発展途上国	68.0（ 50.1）	1,951（ 49.5）	（ 7）

資料：『ソ連邦国民経済統計集』1974年版，98頁，781頁以下による。
注：＊は1974年末の数字。

ここでの社会主義諸国とは，ソ連と東欧諸国（アルバニア，ユーゴスラヴィア，ブルガリア，ハンガリー，東ドイツ，ポーランド，ルーマニア，チェコスロヴァキア），中国とアジアの3カ国（モンゴール，北朝鮮，北ベトナム）およびキューバの合計14カ国である。

非社会主義国をさらに資本主義的発展の進んだ国と発展途上国に分けると，面積と人口で最

大なのは発展途上国グループで，最少なのは先進資本主義グループである。世界人口の５分の１弱にすぎない先進資本主義社会が，それにもかかわらず，世界の工業総生産高の53パーセントを占め，社会主義諸国の40パーセント，発展途上国の７パーセントを引き離している。もっとも統計資料上の点で若干の論議はあるが，ほぼ間違いないであろう。

ソ連中央統計局の推計によると，1951年から1974年までの24年間に，世界の工業総生産高は約５倍（年平均成長率6.9パーセント）にふえたが，その間に社会主義諸国のそれは約10倍（年率10.1パーセント），非社会主義諸国のそれは3.6倍（年率5.5パーセント）であった。（この計算には統計資料の公表されない中国は除かれている）。

統計上の問題の少ない現物表示の重要物質生産高についてみても，同じ期間で，社会主義諸国の電力生産高が9.5倍，石油採掘高が9.9倍，銑鉄生産高が5.9倍に増加したのにたいし，非社会主義諸国の生産高は，それぞれ5.8倍，4.9倍，3.7倍の増加であった。

ソ連，東欧の実質経済成長率をみても，1970年代なかばまでは，日本を除く，先進資本主義諸国を統計上かなり上廻っていたのであり，要するに世界の政治経済にたいする社会主義諸国の影響力は上昇傾向にあり，社会主義は資本主義と並行するひとつの世界体制にまで発展していたのである。

にも拘らず，1980年代の末期ごろからソ連，東欧の社会主義諸国が次つぎと挫折，崩壊し，全世界に深刻な衝撃を与えたのである。

1989年11月９日，ベルリンの壁は打ちこわされ1990年10月３日，ドイツ連邦共和国（西独）とドイツ民主共和国（東独）は統一して，ヨーロッパの中央に8000万人強の人口を擁する統一ドイツが出現した。ソ連はこれを黙認した。

1990年２月，ゴルバチョフは，ソ連共産党中央委員会の席上で，「共産党の一党独裁から複数政党制への移行」を宣言し，翌３月，ゴルバチョフはソ連邦最高ソビエト議長からソ連邦大統領へ就任，６月３日，彼は９共和国，自治共和国の代表と会議を開き，「ソビエト社会主義共和国連邦」という国名から社会主義を消して「ソビエト共和国連邦」とした。さらに同年８月「ソ連国家非常事態委員会」によるクーデターが発生，３日後に失敗したが，ゴルバチョフはソ連共産党書記長のポストを辞任し，74年間執権党であったソ連共産党は事実上解体した。さらに同年12月末にゴルバチョフは，ソ連邦大統領を辞任し，ここに69年間存続したソ連邦は完全に消滅し，連邦最高ソビエト（最高会議）は廃止された。

こうしてレーニンが実現したソ連は，マルクス・レーニン主義の原則を放棄した指導者の手によって崩壊させられ，ブルジョア的堕落の方向におしやられたのである。

ヨーロッパの社会主義諸国の崩壊には，ソ連の指導者の変質が深くかかわっていたとみることができる。ソ連の軍事力は相変らず強大であり，その気になれば，ヨーロッパに社会主義政権を維持することができたであろう。しかしゴルバチョフは，軍事予算の削減や，ソ連経済の再建のために西側の支援を求めて，東欧諸国の反社会主義化を黙認したのである。

1989年6月，ポーランドでは国会議員選挙で「連帯」が圧勝し，東欧で初めての非共産党政権が出現し，またハンガリーでも共産党は選挙で大敗し，非共産党系の政府が樹立した。チェコスロヴァキアでも1989年11月24日から始まった反体制運動で，反体制派知識人や学生を中心に共産党に反対する連立政権が無血のなかで成立し，ブルガリアでも1989年11月10日，35年間政権の座にいたトドル・ジフコフもその座を追放された。

ユーゴスラヴィアでもアンテ・マルコヴィチ首相が資本主義への急激な方向転換を約束し，ドミノ現象の最後となったルーマニアでは1989年12月22日，唯一の流血をみてチャウシェスクの政権は崩壊した。

社会主義挫折の波及を最後にうけたアルバニアは1992年3月の選挙で，社会党は民主党に大敗し，同年7月，全体主義政党禁止法により，旧共産党系勢力はしめ出された。

ソ連，東欧の社会主義のこれらの挫折，崩壊は，何を教えるものであろうか。

V　ソ連，東欧の社会主義崩壊の歴史的教訓について

ソ連，東欧の社会主義崩壊の原因については，本稿の「まえがき」で言及し，また真の社会主義とはどのような社会主義であるかについては，『平壌宣言』のところで述べた。すなわち，社会主義社会・共産主義社会とは，人民大衆を社会の真の主人とし，社会のあらゆるものが人民大衆に服務している社会だということ，そして人民大衆を社会の真の主人とせず，社会のあらゆるものが人民大衆に服務していなければ，そのような社会は社会主義ではなく，必ず挫折し，そこから立ち直るには，人民大衆を社会の真の主人として，その創造力を最大限に発揮させなければならない，ということである。

つまり，社会主義の本質を人間中心＝人民大衆中心に理解しなければならない，ということである。このことは，社会主義を建設するには，人民大衆自身が正しい社会主義思想を身につけなければならないということである。社会主義の正当性，優位性，不敗性について確固とした信念をもつこと，社会主義思想で武装しなければならないことは，人間中心の社会主義建設の不可欠の要因である。

金正日書記は，一部社会主義諸国の挫折，崩壊の根本原因を明らかにするためには，まずこの問題にたいする正しい観点をもち，正しい立場に立たなくてはならないことを次のように述べている。

「それでは，社会主義の道を進んでいた一部の国で今日にいたって社会主義が挫折し，資本主義が復活している現象をどうみるべきでしょうか。

社会主義への道は新しく開拓しなければならない前人未到の道であり，帝国主義との鋭い対立と闘争のなかで前進しなければならないきびしい革命の道です。したがって，社会主義の前進途上には難関と試練がないはずはなく，予想外の事態が発生することもあります。一部の国での社会主義の挫折と資本主義の復活は，歴史発展の主流からみるとき，部分的で一時的な現

象にすぎません。しかし，われわれはこれを決して偶然的な現象とみなすことはできません。また，これが単なる外的要因によるものであるとばかりみなすこともできません。

キムイルソン同志がつねづね指摘しているように，ことが失敗したとき，その欠陥の原因は客観にもとめるべきではなく，主体にもとめるべきです。そうするのが革命家の態度であり，欠陥を是正する正しい方途です。こうした観点と立場で社会主義が挫折した原因を正しく解明し，そこから教訓をくみとってこそ，社会主義偉業を固守し前進させることができます。」（「社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線」1992年1月3日）

このように，社会主義の挫折の原因を偶然の現象であるとみたり，また客観的な外的要因，例えば帝国主義の反社会主義策動などによるものとだけみるのではなく，あくまでもその原因を主体に求め，主体的観点と立場からみなければならない。

主体的観点と立場からみるということは，社会主義建設の主体は，人民大衆であるから，社会主義失敗の原因を人民大衆の観点と立場からみるということである。

金正日書記は一部の国で社会主義が挫折した根本原因は，社会主義の本質を主体的な立場と観点から人民大衆中心に理解しなかったことにあると指摘し，社会主義建設の正しい方途を次のように明確に示している。

「社会主義を建設していた一部の国の社会主義が挫折した根本的な原因は，一言でいって，社会主義の本質を歴史の主体である人民大衆を中心にして理解しなかったため，社会主義建設における主体の強化と主体の役割の向上問題を基本としてとらえられなかったところにあります。

社会主義社会は人民大衆が主人となった社会であり，一つに統一団結した人民大衆の創造力によって発展する社会です。人民大衆が主人としての高い自覚と能力をもって同志的に団結してたたかうところに，あらゆる搾取社会と区別される社会主義社会の本質があり，社会主義社会の発展を促す原動力があります。したがって，人間改造を優先させ，人民大衆を共産主義的に教育して党のまわりにかたく団結させ，革命の主体を強化し，大衆の革命的熱意と創造力を最大限に発揮させて主体の役割を高めるのは，社会主義建設を成功裏に推進する根本的方途となります。社会主義建設を推進するためには，これ以外にいかなる妙策もありえません。しかし，一部の国の人たちはこの真理を正しく理解できませんでした。」（同上）

ここに，社会主義の本質を歴史の主体である人民大衆を中心に理解しなければならないという主体的観点と，社会主義の建設は主体である人民大衆が主人としての高い自覚と能力をもって同志的に団結してたたかうところにあるという主体的立場，および主体を強化し，主体の役割を高めるという社会主義建設を成功裏に推進するための唯一の根本的方途が明確に示されている。

ソ連，東欧における社会主義の挫折は，それまでの党と国家の抑圧的な政策への批判，民主化・自由化の要求，経済生活の停滞と危機への反発，また東欧ではソ連に従属的な体制からの

自立の要求など，いろいろの諸原因があったとみられている。しかしこれらの誤りを発生させた根本原因は，党と国家が人民大衆を社会の真の主人としないことから生じたものである。

人民大衆を社会の主人として社会主義を建設するという問題は，マルクスやエンゲルスの時代にはまだ提起されておらず，レーニンはこの問題に直面したが，彼はソ連における社会主義建設のほんの初期に惜しくも世を去り，この問題に対する十分な解答を残すことはできなかった。このため社会主義制度が樹立された後，社会主義建設をいかなる原理に依ってどのような方法で進めるかという問題は，社会主義を指導する党の前に新たに解決すべき歴史的な課題として提起されたのである。そしてこの課題を解決するにあたって，先行の共産主義理論の成果に学びながら，しかもその歴史的制約性をどう克服するかが重要な意味をもったのである。

金正日書記はマルクス主義の歴史的制約性について次のように述べている。

「マルクス主義は，労働者階級が歴史の舞台に登場し，資本に反対する闘争を展開していた時期に出現した革命学説として，搾取階級と搾取制度を一掃し，人民大衆の階級的解放を実施するうえで不滅の貢献をしました。しかし，時代は変化し歴史は発展するため，マルクス主義も歴史的制約性をもたざるをえません。マルクス主義は一言でいって，唯物史観にもとづいて労働者階級の階級的解放の条件を示した学説だといえます。マルクス主義は社会発展の過程を自然史的過程とみなし，生産力の発展にともなって生産関係が発展し，生産関係の総体である経済制度が当該社会の土台をなし，その土台のうえに上部構造が成立するという理論を提示しました。これにもとづきマルクス主義は，物質的富の生産様式が社会の性格と社会の発展水準を決める決定的要因であり，社会の発展過程は階級闘争によって生産力と生産関係の矛盾が解放され，古い生産様式が新しい生産様式にかわる過程であるとみました。マルクス主義はこのような原理からして，社会主義的生産様式が確立されれば，資本主義から社会主義へ移行する社会革命は終わるものとみなし，共産主義の高い段階と低い段階の違いは生産力の発展水準の違いに帰着するから，社会制度が樹立したあと経済建設を進めて生産力を発展させさえすれば，人類の理想社会である共産主義を実現できるとみなしたのです。結局，マルクス主義は，社会主義制度の樹立後，革命をつづけて社会主義共産主義社会をいかに建設すべきかという問題については正しい解答を与えることはできなかったのです。歴史的にみるとき，マルクス主義は社会主義偉業の先行段階の要求を反映した思想理論であって，社会主義共産主義建設の具体的方途の提示を当面の課題としては提起せず，当時としてはまだそれができる社会的条件も，実践的経験もありませんでした。」（同上）

したがって社会主義制度を樹立したのち，革命を続けて，社会主義・共産主義をどのように建設すべきかという課題は，レーニン以後の社会主義・共産主義者によって解決されねばならなかった。しかし一部の社会主義国の執権党は，残念ながらこの問題を正しく解決できず，社会主義の挫折を招いた。

金正日書記はこのことを次のように述べている。

「社会主義制度の樹立後，社会主義共産主義を成功裏に建設するためには，社会主義建設を指導する党が当然，社会主義の新たな発展段階の要求に即応して共産主義理論を発展させ，それにもとづいて正しい路線と政策を樹立すべきでした。しかし，これまで社会主義を建設してきた一部の国の党は，此の歴史的課題を正しく解決できませんでした。そのため，マルクス主義を指導指針とする社会主義建設を唱えて従来の理論の歴史的制約性をみず，それを教条主義的に適用したかと思えば，他の一方ではマルクス主義の革命的真髄を否定し，修正主義的な政策を実施する道に走りました。」(同上)

従来の理論の歴史的制約性は，社会主義の本質を歴史の主体である人間中心に理解できず，人民大衆を社会の真の主人とすることを中心に社会主義を建設しなかったことである。

金日成主席は社会主義の本質的特性を次のように簡潔に述べている。

「一般的に社会主義についていうとき，人びとは普通，人間による人間の搾取と抑圧がなく，すべての人が平等に暮らす社会であるといいますが，それはもちろん正しい言葉です。しかし，社会主義の本質的特性は搾取と抑圧のない平等な社会だというところにのみあるのではなく，人民大衆が国家と社会の共同の主人として同志的にかたく結合し，社会的人間の本性にふさわしく自主的で創造的な生活を営む社会だということにあります。」(「朝日新聞編集局長の質問に対する回答」1992年3月31日)

このように，社会主義とは人間による人間の搾取と抑圧がない社会であるのは勿論であるが，ただそれだけではなく，さらに人民大衆が社会の共同の主人として同志的にかたく結合し，人間の本性にふさわしく自主的で創造的な生活を営む社会である。

社会主義制度を樹立するためのたたかいは，搾取と抑圧に反対する資本家階級への階級闘争が基本であり，したがって反動的支配階級の反革命策力を撃破する闘争力が重要であったが，社会主義を建設するためには，国家と社会の共同の主人として，社会の利益を個人の利益よりもいっそう大切にし，そのために献身的にたたかう集団主義思想もつことがもっとも重要な問題として提起され，自然と社会関係と人間自身を共産主義的に改造することが切実な要求として提起されるのである。

しかし，マルクス主義を教条主義的に理解する人たちは，この真理を理解できなかった。彼らは，古い搾取制度を打倒して社会主義政権を樹立し，生産手段を社会主義的に所有するならば，あとは生産力を高めさえすれば，社会主義社会の建設は成功し，高度の共産主義社会に到達することができると考えたのである。

金正日書記は次のように述べている。

「従来の理論にたいする教条主義的理解から脱却できなかった人たちは，社会主義社会の本質と優位性が社会主義思想をもった人民大衆によってでなく，社会主義政権と社会主義的所有関係によって決まるとみなし，社会主義建設の推進力も生産力と生産関係の適応という経済的要因にもとめました。もちろん，社会主義政権が樹立され，生産手段にたいする社会主義的所

有関係が確立されれば，人民大衆に主人の地位と役割を保障し，生産力を急速に発展させうる社会的政治的条件と経済的条件が整います。これは資本主義にたいする社会主義の大きな優位性です。しかし，こうした政治的経済的条件そのものが社会主義社会の発展を促す決定的要因になるわけではありません。生産力発展の問題にしても，生産力の発展において主動的で能動的な役割を果たすのは生産の直接的担当者である勤労人民大衆であり，彼らの自発的熱意と創造力を高めることなしには，たとえ社会主義的生産関係を樹立したとしても，生産力をたえまなく急テンポで発展させることはできないのです。」(「社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線」)

以上でみたように，一部社会主義国の挫折と崩壊の根本原因は，人民大衆を指導する党が，社会主義制度を樹立した後，社会主義を建設するにあたって，社会の主人である人民大衆に徹底的に依拠するという観点と立場にたっていなかったからである。つまり社会主義の本質を，社会主義を建設し，自主性を完全に実現しようと，またその創造力も所有している人民大衆を中心にして理解することができなかったからであり，マルクス主義を教条主義的にしか理解できなかったからである。

そのうえ，彼らは，マルクス主義の教条主義的理解から抜け出せなかったために生じた諸困難に遭遇するや，こんどは逆に先行理論の解明した社会主義の正しい原則を放棄し，その優位性をすて去ることによって，社会主義制度を資本主義復帰の途に追いやったのである。

このような彼らの誤りは，したがって3つに要約できる。

第1は，先行理論の教条主義的理解であり，第2は，逆に先行理論の原則の放棄であり，第3は，困難打開の途を資本主義の復帰に求めるという誤りである。そしてこの三つの誤りはすべて人民大衆を社会の主人にしなかったことから生まれたのである。

社会主義の本質は，金日成主席と金正日書記の強調しているように，人民大衆中心に理解されるべきである。人民大衆の自己的志向と創造的建設能力は，社会主義建設で決定的意義をもつ。なかでも根本的に重要なのは，自主的な思想であり，社会主義建設への熱意である。

金日成主席は，一部社会主義諸国の挫折と崩壊が現実のものとなる以前から，思想革命なくしては社会主義を成功裏に建設できないことを次のように指摘している。

「われわれが社会主義・共産主義を成功裏に建設するためには，二つの要塞，すなわち物質的要塞と思想的要塞をともに占領しなければなりません。一部の人は，社会の物質的土台がしっかり築かれ，人民の生活が裕福になれば，それでもう共産主義が実現されたかのように考えていますが，それは誤りです。社会の物質的富が豊富になり，人民の生活が裕福になっても，人びとの頭のなかに古い思想が残っているならば，共産主義を成功裏に建設することはできないし，また古い思想をもっている人は共産主義者とは言えません。

いま一部の国は，比較的に社会の物質的土台がしっかりしており，人民の生活が高い水準にありますが，思想革命を正しくおこなわないので，共産主義を建設するにはまだまだほど遠い

状態にあります。はなはだしいことには，ある国などでは人民にたいする思想教育をおろそかにしたため，すでにかちとった革命の獲得物さえ失いかねない危険な事態がかもしだされたことすらあります。これは，思想革命をおこなわずしては，社会主義・共産主義を成功裏に建設することができず，すでにかちとった革命の成果を強固にすることができないことを物語っています。」（「婦人の革命化，労働者階級化について」1971年10月７日）

社会主義を建設する主体は，社会主義思想で武装した人民大衆であり，自然と社会と人間自身を共産主義的に改造することのできる人民大衆である。

社会主義思想をもった人びとが党をつくり，社会主義政権をつくり，社会主義経済制度をつくるのであり，主体はあくまでも，人間つまり人民大衆である。

金正日書記は次のように述べている。

「社会主義思想をもった人間と社会主義政権，社会主義経済制度は密接に結びついており，ここで基本となるのは社会主義思想をもった人間です。社会主義制度が樹立される歴史的過程をみても，搾取と抑圧に反対するたたかいの過程でまず社会主義思想が生まれ，この思想をもった人たちが革命的な党を組織し，党が人民大衆を意識化，組織化して社会主義政権をうちたて，そのあとで社会主義政権に依拠して社会主義経済制度を樹立するのです。社会主義経済制度は社会主義政権をぬきにしては，維持することも，その本性に即して管理することもできず，また社会主義政権は社会主義思想をもった人間をぬきにしては，維持することも，その本性に即して自己の機能を遂行することもできません。このようにみれば，社会主義社会の発展とその運命を決める決定的要因は，あくまでも社会主義思想で武装した人民大衆であることが明らかとなります。ところが一部の国では，国家主権と生産手段を掌握して経済建設さえ進めれば社会主義を建設できると考え，人びとの思想意識水準と文化水準をすみやかに高め，人民大衆を革命と建設の主体にしっかり準備させる人間改造事業に第一義的力を注ぎませんでした。その結果，社会主義の主人である人民大衆が主人としての役割を果たせなくなり，結局は経済建設も順調にいかず，社会のすべての分野が停滞状態に陥るようになったのです。」（「社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線」）

人民大衆は社会主義社会の発展に必要な決定的要因を整え発展させる直接の担い手である。人民大衆が社会主義思想で武装すれば，生産手段に対する所有関係をはじめ分配，交換などすべての経済関係を社会主義的要求に即して確立することを求めるようになり，古い経済関係を一掃し社会主義経済制度を樹立し強化発展させるようになるのは当然である。なぜなら，社会主義思想で武装した人民大衆は，資本主義の制限性，その非合理性を認識しており，社会主義の優位性，正当性を確信しているからである。

一部の国で社会主義が挫折した原因の一つは，社会主義と資本主義の質的な差異をみず，一貫して社会主義の根本原則を堅持しなかったからである。

いくつかの社会主義諸国が挫折し崩壊したのは，マルクス・レーニン主義に依拠したからで

はなく，反対にマルクス・レーニン主義の原理・原則を放棄したからである。

マルクス・レーニン主義の原理・原則を放棄せず，それを堅持すると同時に，新しい時代の要請とともにそれを深化発展させなければならない。しかし，マルクス・レーニン主義の原理・原則を放棄し，修正主義に転落するなら，マルクス・レーニン主義を深化発展させることはできず，したがって新しい時代の要請と人民の要求にこたえることもできず，そのような社会主義は挫折せざるを得ない。

金日成主席は，マルクス・レーニン主義の原理・原則を継承し，それを人間中心のチュチェ思想にもとづいて深化，発展させたのである。

金日成主席は，階級闘争とプロレタリアートの独裁を実施して搾取と抑圧のない社会を実現し，物質技術的生産力を向上させ，労働の質と量に応じて分配をうける共産主義の低い段階（社会主義）から，必要に応じて分配をうける共産主義の高い段階へと進むというマルクス主義の革命理論を継承すると同時に，それをさらに人間中心のチュチェ思想にもとづいて深化，発展させて，自主性を完全に実現する社会こそが共産主義社会であると，共産主義の本質を人間中心の観点から明らかに規定し，共産主義建設のためには，プロレタリアートの独裁を，人民民主主義的独裁として具現し，発展させ，人民政権のもとでの思想，技術，文化の三大革命の推進により，共産主義の思想的要塞と物質的要塞を完全に占領するという，継続革命路線を朝鮮労働党の総路線として確立，実践したのである。

革命とは，人民大衆の自主性を実現するための人民大衆自身の運動であり，事業である。

人民大衆自身が自主性実現の偉業を成功裏に推進するためには，人民大衆の自主的志向と創造力が最大限に高められなくてはならない。つまり歴史の主体，革命の主体である人民大衆を強化しなくてはならない。

チュチェ思想は，領袖，党，大衆が統一して形成される社会的政治的生命体によって，人民大衆の自主的志向と創造力が最大限に発揮されることを明らかにした。

金正日書記は，金日成主席の創始したチュチェ思想を体系化し，深化発展させているが，書記の思索，探究の豊富な結実の中でも，重要な理論の一つは，社会的政治的生命体に関する理論であった。

金正日書記は，「広範な人民大衆が党と領袖のまわりに一つに固く団結してたたかうところに，社会主義社会を速やかに発展させる基本推進力があり，不敗の力の源がある」（「革命的党建設の根本問題について」）と述べているが，社会的政治的生命体を確立できるかどうかは，まさに社会主義建設の成否を左右する根本問題であり，社会主義の勝利と前進の保障は，人民大衆を社会の主人とし，人民大衆を社会的政治的生命体として団結統一させることができるかどうかにかかっている。

『平壌宣言』は「社会主義社会の前進のための保障は，人民大衆を社会の真の主人とすることである」と指摘しているが，人民大衆を社会の真の主人とするためには，指導者と党と大衆

が，同志的に一つに結ばれて，人民が社会的政治的生命体を形成しなければならない。

人民大衆が社会の主人となって社会的政治的生命体を形成している人間中心の社会主義朝鮮は，今日，ブルジョア個人主義を一掃し，「一人はみんなのために，みんなは一人のために」という集団主義を堅持して，社会主義の完全勝利に向って邁進している。

社会主義の建設は，主体としての人民大衆が，集団主義の旗じるしの下で一致団結してその創造力を最大限に発揮してのみ成功を収めるものであり，社会的政治的生命体を形成して集団主義にもとづき，英雄的に闘う人民大衆の三大革命運動なくしては勝利することはできない。朝鮮式社会主義の勝利は，まさに，チュチェ思想を具現して，歴史の自主的主体を，社会的政治的生命体にまで強化発展させたことにある。

マルクス・レーニン主義の偉大なる貢献については，改めて指摘するまでもない。しかしその時代的制約のために，マルクス・レーニン主義は，世界と自己の運命の主人であり，自主性，創造性，意識性をもつ社会的存在である人間＝人民大衆中心の世界観としては完成されていなかった。このため社会主義・共産主義の本質も，人間中心の観点からみることはできなかった。しかし金日成主席は，社会主義・共産主義の本質を人間中心の観点から解明し，社会的政治的生命体を形成し，人民政権プラス3大革命路線を貫徹して，社会主義の完全な勝利と共産主義の実現の道を明らかにしたのである。

チュチェ思想にもとづく人民大衆中心の社会主義・共産主義理論こそは，現時代，自主の時代の要請に応える最も正しい社会主義・共産主義理論である。

そしてこの正しい社会主義・共産主義理論を具現しているのが朝鮮民主主義人民共和国である。